

第五章 中君の物語 中君、薫の後見に感謝しつつも苦悩す

[第一段 翌朝、薫、中君に手紙を書く]

昔よりはすこし細やぎて(御方は以前よりは少しほっそりして)、あてにらうたかりつるけはひなどは(上品で可愛らしい印象などは)、立ち離れたりともおぼえず(分かれて帰って来た気もせず)、身に添ひたる心地して(今も直ぐ側にいるように思えて)、さらに異事もおぼえずなりにたり(薫君はその他の事は考えられないのでした)。

「宇治にいと渡らまほしげに思いためるを(宇治にとても行きたがっていらっしやったので)、さもや、渡しきこえてまし(そのようにして差し上げられたら良いが)」など思へど(などとは思わうが)、「まさに宮は許したまひてむや(それそのものをどうして宮がお許しなされようか)。さりとして、忍びてはた、いと便なからむ(とあって、内密に事を運ぶのは不穩当だ)。いかさまにしてかは、人目見苦しからで、思ふ心のゆくべき(どうすれば体裁良く上手く事が運べるだろうか)」と、心もあくがれて眺め臥したまへり(と薫君は御方を思い焦がれて悩み臥していらっしやいました)。

まだいと深き朝に*御文あり(まだ朝の暗い内に中納言の御手紙が御方に届けられました)。例の、うはべはげざやかなる*立文にて(例によっていかにも尤もらしい儀礼状の体裁で)、*「おおんふみ」は薫君から御方への手紙、らしい。分かり難い。*「たてぶみ」は時代劇の達し文などにあるようなく包み上紙の上下を内折りした書状>と古語辞典に図説がある。

「いたづらに分けつる道の露しげみ、昔おぼゆる秋の空かな (和歌 49-12)

「いたづらに 涙を誘う 秋の空 (意訳 49-12)

*注に<薫から中君への贈歌。「露」に涙を暗示する。>とある。この歌の外形上の、つまり儀礼的な意味合いは、故八宮の追善供養を薫君が執り行った事に対する御方の労いであった昨日の会見、への薫君の御礼挨拶、ではあるのだろう。だから、表意は故宮の年忌法要で宇治へ分け入った時の追悼と哀悼が示されているのだろう。「いたづらに」は<不用意に、準備不足で>みたいな言い方で、意外な草深さに脚が濡れた、という宇治の風情に故人を懐かしむ涙を重ね詠んでいて、「いたづらに」なった故宮への追悼意も掛けられている、というところか。で、内意だが、是は下文の「御けしきの心憂さはことわり知らぬつらさのみなむ」と明示されることから、逆推出来るという仕掛けになっているようで、「いたづらに分けつる道の露しげみ」は<拒まれて徒労に終わった踏み込んで打ち明けてみた恋の道に涙して>で、「昔おぼゆる秋の空かな」が<去年の何も無かった一夜が思い出される同じ秋の頃です>ということなのだろう。一昨年姉君が仕掛けた妹君の身代わり事件は、故宮の一周忌明け直後の八月末くらいのことだった。ちょうど今と同じ頃、という設定だ。その姉君も一昨冬に急逝しているという非常な急展開だった。

御けしきの心憂さは(私の恋情をお受け止め頂けないという、あなたの御意向の悲しさは)、ことわり知らぬつらさのみなむ(宇治へ逃げ帰りたいというあなたの心情に反するもので、私には理解出来ない苦しさだけしかありません)。聞こえさせむ方なく(言葉もごさいません)」

とあり(とありました)。御返しなからむも(御返事をしないのも)、人の、例ならずと見とがむべきを(女房たちが普通ではないと見咎めそうなので)、いと苦しければ(とても困って)、

「承りぬ(御手紙は拝見しました)。いと悩ましくて、え聞こえさせず(ただ非常に体調が悪いので、御返事申せません)」

とばかり書きつけたまへるを(とだけ御方が書付なされたのを)、「あまり言少ななるかな(あまりに素っ気無い)」とさうざうしくて(と薫君は物足りなくて)、をかしかりつる御けはひのみ恋しく思ひ出でらる(久しぶりに近く見た御方の可愛らしかった御姿ばかりが恋しく思い出されます)。

すこし*世の中をも知りたまへるけにや(それに御方は、少し男女の機微もお分かりなのか)、*さばかりあさましくわりなしとは思ひたまへりつるものから(あのように私が不意に袖を掴んだ事を粗野で強引とはお思いになったものの)、ひたぶるにいぶせくなどはあらで(ひたすら毛嫌いするでもなく)、いと*らうらうじく*恥づかしげなるけしきも添ひて(とても落ち着いて立派な姿勢も備わって)、さすがになつかしく言ひこしらへなどして(それでも静かに私を言いなだめて)、出だしたまへるほどの心ばへなどを思ひ出づるも(母屋から追い出しなされた時の対処を思い出されるにも)、*ねたく*悲しく(不首尾が深く反省されて)、さまざまに心にかかりて(いろいろな事が悪く心配されて)、*わびしくおぼゆ(悲観されます)。 *「世の中」は<男女の仲←大人の付き合い>くらいの語感らしい。 *「さばかり」は<不意に簾の外から手を入れて御方の袖を掴んだという中納言の大胆な振る舞い>のことなのだろう。 *「らうらうじ」は<物慣れている>と古語辞典にあり、「世の中をも知りたまへる」を受ければ<男の扱いに手馴れている>くらいの分意にもなりそうだが、御方がそれほど男慣れしているという印象は無いので、此处では<慌てずに落ち着いている>という事かと思う。 *「恥づかしげ」は<恥じらいのある>という語用もあるようだが、此处では傍目に緊張を強いるような<凜とした威厳ある姿勢>のことらしい。御方様としての体面というよりも母性の強さかも知れない。 *「ねたく」は<憎い、残念だ>と語用されるが、古語辞典には<「名痛し」の約>との説明もあり、であれば、名折れだ→気が引ける→恥づかしい←妬ましい、という語感もありそう。 *「かなし」は<悲しい>だけでなく、何かに深く感じ入る言い方で、此处では「ねたく」を深く思うのだろう。 *「わびし」は<寂しい>と言うよりも<不安で心細い>という語感。

*何事も(しかし御方は全てが)、いにしへにはいと多くまさりて思ひ出でらる(以前よりはとても多く優れていると薫君には思い出されます)。 *「なにごとも」からは、上文での反省にも関わらず、それでも御方の印象は以前にも増している、という文意のようなので、逆接の<しかし>を補語したい。

「何かは(別に良いじゃないか)。この宮離れ果てたまひなば(匂宮が御方から遠ざかってしまいなさったら)、我を頼もし人にしたまふべきにこそはあめれ(御方は私を御頼りなされば良いのだから)。さても(そうなっても)、あらはれて心やすきさまにえあらしを(公然と親密には出来ないが)、忍びつつまた思ひます人なき(人目を忍んで他にこれ以上に愛する人もない)、心のとまりにてこそはあらめ(最後の女になるだろう)」

など、ただこの事のみ、つとおぼゆるぞ(などと御方の事ばかりをずっと考えているというの)、けしからぬ心なるや(不穏当な薫君の恋情なのです)。さばかり心深げにさかしがりたまへ

ど(いくら思慮深そうに聖人ぶっていらしても)、男といふものの心憂かりけることよ(男心の浮ついたこと)。亡き人の御悲しさは、言ふかひなきことにて(故姉君への恋情は、最早言っても仕方の無い事と)、いとかく苦しきまではなかりけり(ここまで思い詰めることはなくなっていたが)、これは、よろづにぞ思ひめぐらされたまひける(この妹君への恋情は、いつまでも尽きること無く思い巡らされなさるのでした)。

「今日は、宮渡らせたまひぬ(今日は、宮が二条院においでになります)」

など、人の言ふを聞くにも(などと従者が報告するのを聞いても)、後見の心は失せて(薫君は御方の世話役の心算は消えて)、胸うちつぶれて(嫉妬に胸が詰まって)、いとうらやましくおぼゆ(宮がとても羨ましく思えます)。

[第二段 匂宮、帰邸して、薫の移り香に不審を抱く]

宮は、日ごろになりにはけるは(宮は何日か二条院に来なかったのを)、わが心さへ恨めしく思されて(自分でも気懸かりにお思いになって)、にはかに渡りたまへるなりけり(急にお見えになったのでした)。

「何かは(何も)、心隔てたるさまにも見えたてまつらじ(わだかまりがあるようにはお見せ申すまい)。山里にと思ひ立つにも(宇治へ帰ろうと思っても)、頼もし人に思ふ人も(頼りに思っていた中納言も)、疎ましき心添ひたまへりけり(面倒な気持をお持ちだったし)」

と見たまふに(と御方はお思いになると)、世の中いと所狭く思ひなられて(世の中がとても生き難く思われて)、「なほいと憂き身なりけり(やはり憂き身のつらい立場だった)」と(と古歌に準えて)、「ただ*消えせぬほどは(しかし泡のように消えてしまうまでは)、あるにまかせて、おいらかならむ(成るに任せて穏やかにしていよう)」と思ひ果てて(と観念して)、いとらうたげに(とても素直に)、うつくしきさまにもてなしてみたまへれば(可愛い態度で応対していらっしやったので)、いとどあはれにうれしく思されて(宮は御方がいっそういじらしく嬉しくお思いになって)、日ごろのおこたりなど(この数日の留守の言い訳など)、限りなくのたまふ(言葉を尽くして慰めなさいます)。 *「消えせぬほどは」は注に<『源氏積』は「憂きながら消えせぬものは身なりけりうらやましきは水の泡かな」(拾遺集哀傷、一三一三、中務)を指摘。>とある。「憂き」と「浮き」の掛詞は現代語でも分かり易い。

御腹もすこしふくらかになりたるに(御腹も少し大きくなってきていて)、かの恥ぢたまふしるしの帯の引き結はれたるほどなど、いとあはれに(その恥ずかしがっていらっしやる腹帯姿が、とても愛しく)、まだかかる人を近くても見たまはざりければ(匂宮はこうした妊婦を間近に御覧になった事がなかったので)、めづらしくさへ思したり(珍しくもお思いでした)。

*うちとけぬ所にならひたまひて(匂宮は六条院で馴れぬ新婚生活をなさっている)、よろづのこと(この二条院ではすべてが)、心やすくなつかしく思さるるままに(安心して懐かしく思われなさるるままに)、おろかならぬ事どもを(変わらぬ愛を)、尽きせず契りのたまふを聞くにつけても(尽きること無く約束なさるるのを聞くにつけても)、かくのみ*言よきわざにやあらむと(こ

んなことばかり男は言葉では良い事を言うものらしいと)、*あながちなりつる人の御けしきも思ひ出でられて(昨夜の中納言の強引な態度も思い出されて)、年ごろあはれなる心ばへなどは思ひわたりつれど(年来親切な心遣いだと思ひ続けてきたが)、*かかる方ざまにては(世の中がこういう人間模様だとすると)、*あれをもあるまじきことと思ふにぞ(相談事も中納言に頼るべきではないと御方は思うので)、この御行く先の頼めは、いでや(この宮の将来の頼り甲斐はどうなのだろう)、と思ひながらも(と不安に思いながらも)、すこし耳とまりける(少しはその言葉に耳を傾けます)。*「うちとけぬ所」は与謝野訳文の<新居>という補語で、是が<六条院での新婚生活>のことだと理解できた。普通の何と言うことも無い女房語りなのかもしれないが、私にはとても分かり難い言い回しと話運びの間だ。で、「よろづのこと」は<この二条院でのすべて>のことらしく、となると、「ならひたまひて」の接続助詞「て」は理由説明を示しているようだが、やはり私には何とも舌足らずの分かり難い文に思えてならない。*「ことよきわざ」は男全般に付いて<口が上手い性質だ>という言い方らしい。*「あながちなりつるひとのみけしき」は注に<薫。昨夜の態度をさしていう。>とある。分かると言えば分かるし、分かっただけで、こういう言い方をするものと思えば良いようにも見えるが、私には何故か、と考えれば理由は分かるような気もするが、私の不勉強や無教養の所為だと思うのは厭なので、面倒だからと詮議は切り上げて、専ら作者を難じる気持のまま、此処も含めてこの文全体が暗号に見えるほどの難文だ、と不満を示して置く。*「かかるかたざま」は、中納言と故宮の親交を信じようとしたが、結局、薫君の親切は自分への色目当てと御方は知ったのであり、世の中の人々の親切は通り一遍以上の深さとなると特別な感情無しには成立しないものだ、と御方は改めて認識した、という文意に私は読んで置く。*「あれをもあるまじきこと」の「あれ」は<宇治への微行を中納言に相談すること>だろう。

「さても(しかし中納言は)、あさましくたゆめたゆめて(よくもあれほどに親身めかして、私をすっかり油断させておいて)、入り来たりしほどよ(母屋内にまで入って来たものだ)。*昔の人に疎くて過ぎにしことなど語りたまひし心ばへは(姉君とは親密に成らずじまいだったという二人の仲の物語でいらっしやった中納言の心掛けは)、げにありがたかりけりと(実に尊いものと)、なほうちとくべくはた(私までが気を許すのは)、あらざりけりかし(間違いだった)」*「昔の人に疎くて過ぎにしこと」は注に<大君と肉体関係なく過ごしたことをいう。>とある。昔の人=故姉君、という語用は今までに何度も使われているので、この物語ならではの分かり難い言い回しではあるものの、何とか是は心当たりが付く。が、もっと分かり難いのが「語りたまひし心ばへ」の「語りたまひし」の「語り」だ。この文の主語は「心ばへ」が<中納言の心構え>のことだろうから、「語りたまふ」のは中納言だろうが、この「語り」が<中納言が御方に話した>という語用だとは、私にはどうしても思えない。「語る」は<ものがたる=事柄を説明する>のであって、単に何かを「言ふ」「聞こゆ」という場面描写ではないだろう。そして、その「事柄」の本人が薫中納言であってみれば、この「語りたまふ」は<そういう事柄を成していらっしゃる>という言い方かと思う。

など(などと御方は)、いよいよ心づかひせらるるにも(ますます男の言動には用心させられるものの)、久しくとだえたまはむことは(宮が長くお見えに成らなくなることは)、*いともの恐ろしかるべくおぼえたまへば(中納言の接近がとても危ぶまれる気がなされたので)、言に出でては言はねど(気を引くような言葉は言わないが)、過ぎぬる方よりは、すこしまつはしざまにもてなしたまへるを(以前よりは少し身を寄せて親密になさるのを)、宮はいとど限りなくあはれと思はしたるに(宮はいっそうこの上なく可愛いとお思いになったが)、*「いともの恐ろしかるべくおぼえたまへば」は注に<『集成』は「宮の不在中の薫の接近を恐れる気持」と注す。>とある。従いたい。

かの人の御移り香の(薫君の移り香が)、いと深くしみたまへるが(御方にとても深く染み付いていらっしゃるのが)、世の常の香の香に入れ薫きしめたるにも似ず、しるき匂ひなるを(普通の香料を焚き染めたものとは違って、はっきりそれと分かる匂いなのを)、*その道の人にしおはすれば(宮はその道に詳しくいらっしゃったので)、あやしととがめ出でたまひて(変だと咎め出しなさって)、いかなりしことぞと、けしきとりたまふに(どうということかと御方に問い質しなると)、ことのほかにもて離れぬことにしあれば(実事は無かったとは言え、中納言と触れ合ったことには違いなかった)、言はむ方なくわりなくて(御方は言い訳の仕様もなく)、いと苦しと思したるを(とても困ったとお思いになったのを)、*「その道」は<香料の知識>という言い方に<色の道>を掛けているのだろう。でなければ、何も此処で匂宮が薫香に詳しい事などを持ち出す必要は全く無い文脈だ。この言い方で、当時の読者女房は男が肩を抱いて首から耳へ口唇を這わせて、愛しい可愛いと熱い言葉をささやいては、胸に手を滑り込ませてくる感触を思い出す、という仕掛けなのだろう。で、それは即ち、匂宮が薫君と同じように御方を抱き寄せたので、その移り香に匂宮は薫君の仕業を察知した、という文意であり、その臨場感と緊迫感で読むべき場面なのだろう。読者にも、薫君が御方に何処までの事をしたのかは明かされていないので、匂宮がどう思うのか、御方がどう応えるのかは、相当な見所だ、ろうとは思ふ。ただ、この続編物語の語りは本編に比して、作者の時代意識や社会的視点が低下してか希薄で、如何にも女房語りの痴話話然として、それはそれで天皇家の側近女房による奇跡の暴露話という興味はあるが、生活様式の常識に基づく話の展開構造や言い回しの難解さからか、私の根が続かない事が多く、折角の見所も快適には楽しめない。

「さればよ(やはりそうか)。かならずさることはありなむ(有り得ることだ)。よも(いずれにしても)、ただには思はじ(中納言は私の留守に無関心ではいられないだろう)、と思ひわたることぞかし(とは、ずっと思っていたことだ)」

と御心騒ぎけり(と匂宮は胸騒ぎなさるのでした)。*さるは(実は御方は宮の疑いに用心して)、単衣の御衣なども、脱ぎ替へたまひてけれど(下着まで替えていらっしゃったのだが)、あやしく心より外にぞ身にしみにける(薫君の独特な芳香は思いの外に強く御方に染み付いていたのです)。*「さるは」は注に<『集成』は「以下、匂宮に疑われぬように、中の君は用心して下着の単なども着がえていられたのだが、と事情を説明する草子地」と注す。>とある。

「かばかりにては(こういうことでは)、残りありてしもあらし(最後まで行ったのだろう)」

と(と宮が)、よろづに聞きにくくのたまひ続けるに(何かと責め続けなさるので)、心憂くて、身ぞ置き所なき(御方は辛くて身の置き所がありません)。

「思ひきこゆるさまことなるものを(私があなを思う気持は特別なものなのに)、我こそ先になど(見限るなら自分の方から先になど)、*かやうにうち背く際はことにこそあれ(このように背信する立場は臣下身分のものであって、伴侶たる部屋方には不相応だ)。また御心おきたまふばかりのほどやは経ぬる(それに、あなたが見限りの疑心をお持ちなさるほどの長い別れだったでしょうか)。思ひの外に憂かりける御心かな(意外な不誠実さだ)」*「かやうにうち背く際はことにこそあれ」は注に<裏切るのは身分の違った女即ち卑しい身分の女がすることですよ、の意。>とある。確かに難文だ。ところで、「きは=身分」という語用もあるだろうが、其処で言う「身分」は正式の公的な官位というよりは、身の程という意味の<分際>という語感なのだろう。だから、注釈でも「卑しい身分」としてあるのだろうが、匂宮

の価値観や合理性を付度するに、主人と補佐役を区別する語こそが「際」だ、というように私には聞こえる。宮の認識では、意識すべき人物はせいぜい上臈までで、それ以下の使用人は範疇外なのであり、そも「卑しい身分」の事など考えもしないのだろう。その上で、朝臣には対外交渉上の独自の立場があるので、その者自身の生き残りの為に結果として主人を裏切ることは、決して許されないが、しかし実際には有り得る。が、主人の分身たる伴侶は、裏切り＝破滅なので、その選択は有り得ない。そんな論理なのだろう。でなければ、「思ひきこゆるさまことなるものを」が論理根拠項として成立しない。と思うので、敢えてその論理性が見え易い言い換えを心掛けた。いや勿論、この論理は宮の勝手な考え方で正当な根拠に基づくものではない。が、一定の組織論や夫婦形態論・制度論には符合するだろうし、王家の代表的な考え方が示されている、とは見做せるのかも知れない。

と(と宮は)、すべてまねぶべくもあらず(すべてを逐一に再現できないほど興奮狼狽して)、いとほしげに聞こえたまへど(悲しそうに言い聞かせなさったが)、ともかくもいらへたまはぬさへ、いとねたくて(御方が何ともお応えなさらないのさえ、実に癪に障りこう贈歌なさいます)、

「また人に馴れける袖の移り香を、わが身にしめて恨みつるかな」(和歌 49-13)

「恨み袖 他の男の 移り香よ」(意訳 49-13)

*注に<匂宮から中君への贈歌。「馴れ」「袖」縁語。「恨み」に「裏」を響かせ、「袖」との縁、また「心」を響かせて、「あなたの心を見てしまった」の意を言外に匂わす。>とある。確かに、「うらみつる」は匂宮の思いでもあるだろうが、同時に相手にいろいろな思いを抱かせる悩ましい語だ。また、「わが身にしめて」の「沁む」は<沁みる>という自動詞ではなく<沁ませる>という他動詞なので、自分は染まるのではなく、自分の意志で考えて焚き染めるのだ、という薫君への反感が示されている、のだろう。

女は(御方は女心に)、あさましくのたまひ続けるに(夫の宮が容赦なく罵り続けなざるのに)、言ふべき方もなきを、いかがは、とて(何も応えないのではどうにもならないと)、

「みなれぬる中の衣と頼めしを、かばかりにてやかけ離れなむ」(和歌 49-14)

「この袖は 主との仲を 頼るもの」(意訳 49-14)

*注に<中君の匂宮への返歌。「馴れ」の語句を用いて返す。「馴れ」「衣」縁語。「かばかり」に「香」を掛ける。>とある。「中の衣」は<内着>のことで、親しい仲の意味で語用されるらしい。宮が「袖の移り香」と詠んだことに返した形で、その「袖」は<あなたとの縁と頼りにしているものなのに>と擦り寄って、それを<こんな程度の移り香で見限りなざるのか>とは、御方らしくもない女郎詠みだ。反論らしい内容は無く、私の真心を信じて呉んなまし、と訴えているわけだ。それでも何とかこの場が収まる、というのが人間模様を写す和歌の気の利いた言い回しのワザ、ということだろうか。寄席の大喜利ならそれで済むだろうが、これは不義密通の類の話で、是で収まるとはとても思えない。

とて(と返歌して)、うち泣きたまへるけしきの(泣き出しなざる様子が)、限りなくあはれなるを見るにも(この上なく痛々しいのを見るにつけても)、「*かかればぞかし(是だから女は始末が悪い)」と、いと*心やましくて(と、責め立てた事にとても気が咎めて)、我もほろほろとこぼしたまふぞ(宮自身もほろほろと涙をこぼしなざるのは)、色めかしき御心なるや(御方の色気に弱

い宮の助平根性なのでしょう)。まことにいみじき過ちありとも(真に不埒な不義密通があったとしても)、ひたぶるにはえぞ疎み果つまじく(一気には見捨て難いように)、らうたげに心苦しきさまのしたまへれば(御方は愛らしく困っている様子でいらっしゃるので)、えも怨み果てたまはず(とても憎み切りなされず)、のたまひさしつつ(責めるのは止めて)、かつは*こしらへきこえたまふ(むしろ、御前の誠実さは分かったからもう泣くな、疑って悪かった、などと宥め申しなさいます)。*「かかればぞかし」は与謝野訳文に<こんな魅力が中納言を惹きつけたのであろう>とあって、それは一見、説得力のある言い換えに見える。が、だとすると、宮は冷静に御方を客観的に観察していることになり、そんな御方と中納言の仲に宮は興醒めしかねないのであり、「色めかしき御心なるや」の結びに符合しない。むしろ宮は此処に至って、御方の可憐さに絆されて、薫君が近付いたことは間違いないが、この御方の可憐さを圧して中納言が無体に及ぶことは、さすがにないだろう、と判断し、御方を信じ、今はこれ以上の追求は止めよう、と一先ずは許したのだろう。で、それもこれも「色めかしき御心なるや=御方を愛玩したいので手放したくない宮の気持なのだろう」と結ばれるのが合理的だ。ということは、この「かかればぞかし」は例え<こんな調子だから中納言が同情するのも無理はない>と匂宮が思うことがあったとしても、そんなことより、今は宮自身が<こんな調子では同情しないではいられない=是だから女は困る>と御方を許してしまう、ということで、男は女の涙に弱いという正にその場面と読んで置きたい。いや、だからといって、決して是で一件落着というわけではないだろうが、今この場では、宮は許せない気持よりも抱きたい欲望が勝って、破滅的な事態ではないと自分に言い聞かせる為に、こういう形で一応の収束を見た、という語りなのだろう。*「心やまし」は<なやましい心地がする>と古語辞典にある。が、現代語の「心疾しい」は<自分の落ち度に心当たりが合って気が引ける→気が咎める>という自責の語用であり、此処でもそういう語用なのだろう。「やまし」は「病む(病気になる、変調を来たす)」の形容詞化した語と古語辞典に説明があり、「気に病む」は<変調を来たすほど心労する→悲観する>という言い方だから、「やまし」は元々は不都合な事態の進展を案じるという語意であり、それで体調を崩すほどになるという事態が、他人事ではない本人の重大事だという認識を広めて、次第に自責の語用に偏ってきたのかも知れない。*「こしらふ」は<こなだめる、とりなす、取り繕う>などと古語辞典にある。臨場感を得る為に、その宮の言葉の内容を補語してみるが、この場面自体は、そして情事に至るといふ全くの濡れ場で、それが「こしらふ」の語感だろう。

[第三段 匂宮、中君の素晴しさを改めて認識]

またの日も(翌日も匂宮は)、心のどかに大殿籠もり起きて(此方の二条院でゆっくりとお起きなさって)、*御手水(洗面や)、御粥などもこなたに参らす(朝食なども寢室に用意させて済まします)。*「御手水」は「おおんてうづ」とローマ字表記があるが、私は何故か<みてうづ(みちょうず)>と読みたくなる。「御」の読みは本当に分からない。だが、「御粥」は「おおんかゆ」で納得出来るので、本人が自身で用を足すものと、供えられた仕上がり品との区別が、語用の一例にはありそうな気がする。

御しつらひなども(御部屋の間仕切り幕なども)、さばかりかかやくばかり(六条院のさも輝くほどの)、*高麗、唐土の錦綾を裁ち重ねたる目移しには(半島や大陸からの高級輸入織物を飾り付けてあるのを見慣れた宮の目で見比べれば)、世の常にうち馴れたる心地して(此処のは普通で落ち着いた気分がして)、人びとの姿も、萎えばみたるうち混じりなどして(女房たちの服装も、着慣らした普段着で仕え交じって)、いと静かに見まはさる(とても心静かに見回されます)。*「こまもろこしのにしきあやをたちかさねたる」は、その字句を現代語に言い換えるのでは恐らく正確さを損なうことになるので、いっそ現代の認識で事柄を意識して置く。

*君は(宮に抱かれた御方は)、なよよかなる*薄色どもに(馴れた生地の薄紫の内着に)、*撫子の細長重ねて(紅梅色の上着を撫子重ねに着て)、うち乱れたまへる御さまの(しどけなくなさっている御姿は)、*何事もいとうるはしく(万事整然として)、ことことしきまで盛りなる人の御匂ひ(堅苦しいほど気張った源氏六姫の御様子に)、何くれに思ひ比ぶれど(何かと思ひ比べられるが)、気劣りてもおぼえず(見劣りするような印象は無く)、なつかしくをかしきも(親しみがあって美しいのも)、心ざしのおろかならぬに恥なきなめりかし(宮が惚れ込むに足るものようです)。*まろにうつくしく肥えたりし人の(丸々と可愛らしく太った人が)、すこし細やぎたるに(妊婦らしく少し痩せて細くなっているところに)、色はいよいよ白くなりて(色は都暮らしでいっそう白くなって)、あてにをかしげなり(上品で趣きがありました)。*「きみ」の語感は難しいが、此処での意味は少なくとも<宮の情交相手>を示してはいるのだろう。*「うすいろ」は<薄紫>らしい。*「なでしこ」の花の代表的な色は薄赤紫で、単体の色名としてはピンクのことらしいが、重ね着の色あわせとしては、薄紫の内着に紅梅の上着という取り合わせが多くの色見本サイトに示されているので、この「撫子の細長重ねて」の場合の上着は淡い紅色ではあっただろうが、薄い色合いではなかったかもしれない。*「何事もいとうるはしく」から「気劣りてもおぼえず」までは挿入句だ。注には<以下「御匂ひ」まで、六の君の描写。>とある。何も此処に限らないが、こうした文節校訂無しには、とても私などには原文などは読み下せないだろうと改めて感じ入る。*「まろにうつくしく肥えたりし人」は御方のことらしいが、宇治に居た時にも、痩せて小柄な姉君よりは快活くらの説明で、背が高く中肉中背と描かれていたように思うので、少し意外だ。が、六姫との対比で色気が際立つ、という気分は感じ取れる。

かかる御移り香などのいちじるからぬ折だに(この中納言の移り香などがはっきり分かる前から)、愛敬づきらうたきところなどの(人懐こく放って置けない人柄が)、なほ人には多くまさりて思さるるままには(やはり他の人より多いと思われなさるので)、

「これをはらからなどにはあらぬ人の(この人を実の兄妹でもない中納言が)、気近く言ひかよひて(間近に言葉を交わして)、事に触れつつ(親身な相談事で)、おのづから声けはひをも聞き見馴れむは(自然と本人の声や姿をその実像として見聞きして親しめば)、いかでかただにも思はむ(どうして何とも思わずにいられるだろう)。かならずしか思しぬべきことなるを(必ず可愛がりたくなるに決まっている)」

と(と匂宮は)、わがいと隈なき御心ならひに思し知らるれば(自分のそれはもう身を持って知る女好きからお分かりになるので)、常に心をかけて(今までもいつも気にして)、「しるきさまなる文などやある(御方の浮気の証拠になる手紙などはないだろうか)」と、近き御厨子(と手近な御文庫棚や)、小唐櫃などやうのものをも(小さな文箱などのようなものまでも)、さりげなくて探したまへど(何かの序でのような体で探しなさるが)、さるものもなし(それらしいものはありません)。

ただ(ただ中納言の手紙が)、いとすくよかに言少なにて(とても堅苦しい事務的な文面で簡潔に)、*なほなほしきなどぞ(儀礼状などで)、わざともなけれど(普通の事なのだが)、ものにとりませなどしてもあるを(他の手紙に紛れてあるのを)、「あやし(変だ)。*なほ(しかし、やはり二人の間柄からして)、いとかうのみはあらじかし(こんな礼状だけの筈はない)」と疑はるるに(と疑われるので)、いとど今日はやすからず思さるる(まして今日は宮が心穏やかならずお思いにな

るのは)、ことわりなりかし(当然の事でした)。*「なほなほし」はくごく普通だ。有り触れている>という形容詞のようだが、是は文面の事を言っているのだから<在り来たりだ=類型的だ=決まり切った挨拶文=季節柄などの儀礼状>という意味なのだろう。さすがに御方はあぶない手紙は嚴重に隠しただろうし、歌などは小さな別紙に書かれていたのかも知れない。ただ、そういう御方の行為は、中納言の気持を十分に認識していた事を意味するし、その上で誘った、ということは、何処まで求めていたのかは微妙だが、御方にも水心があった事を示す、という文意だ。*「なほ」はずいぶん便利に使われている感がある語だが、また、それを<やはり>と言い換えて凡そ事は足りる気もするが、「なほ」も「やはり」も相当に曖昧だ。思い付きだが、「や」は<事物の一定状態の認識>を示し、「は」は論理結論を示す<=>みたいな論理語で、「り」は<結果事態>を示すが、見込予測に於いての「結果事態」は<期待値>であって、現状がその「期待値」未満の場合に、更に事物の動向が続くという見通しを述べる時の副詞が「やはり」だ、というのはどうだろう。「矢張り」と当て字するのも、矢を張れば一定の距離に矢が飛ぶ事が予測される、という共通概念があるからだろう。「なほ」の「な」も事物の仮定状態を言っているような語感だし、「ほ」も持続感と不確かさがある。いや、御託が過ぎたが、此処の「なほ」は<やはり>だけでは物足りなく、「さすがに」「されど」の語感が強いし、その目的語は<中納言と御方の間柄>なのだろう。

「かの人のけしきも(あの中納言の方の様子も)、心あらむ女の、あはれと思ひぬべきを(浮気女が傾くに違いない男前なので)、などてかは(どうしてこの御方も女心に)、ことの他にはさし放たむ(中納言を心外だと撥ね返すだろうか)。いとよきあはひなれば(似合いの者同士なので)、かたみにぞ思ひ交はすらむかし(相思相愛になるだろう)」

と思ひやるぞ(と思えば)、わびしく腹立たしくねたかりける(気弱になり不愉快で憎らしい)。なほ(宮はずっと)、いとやすからざりければ(とても心穏やかではないので)、その日もえ出でたまはず(その日も二条院を離れられません)。六条院には、御文をぞ二度三度たてまつりたまふを(しかしまた宮は、六条院には御手紙を二度三度と差し上げなされるので)、

「いつのほどに積もる御言の葉ならむ(こんな僅かの時間に、あちらの御方には、どんな積もるお話しがあるっていうんでしょうね)」

とつぶやく古い人どもあり(と陰口をいう古女房たちも居ました)。

[第四段 薫、中君に衣料を贈る]

中納言の君は(中納言の男君の方は)、かく宮の籠もりおはするを聞くにしも(このように匂宮が二条院に留まっていらっしゃるのを聞くにつけても)、*心やましくおぼゆれど(一昨日の自分の言い寄りから、御方が不義を疑われて責められているのではないかと懸念されたが)、*「心疾し」は自責を感じる反省の語感が強いが、反省は下文に述べられるので、此処では<深刻に懸念される>くらいの言い方で、特に<御方への謝意>と取って置く。

「*わりなしや(今は御方をお助け申す手立てがない)。これはわが心のをこがましく悪しきぞかし(是は偏に私が愚かで誤まった所為だ)。うしろやすくと*思ひそめてしあたりのことを(後ろから見守ろうと深く思い込んでいた御方のことを)、かくは思ふべしや(恋愛相手に思って良いものか)」*「わりなし」は<難儀だ、困った>または<しかたがない、止むを得ない>などの一般的な不都合認識の副詞語用も多いだろうが、そういう曖昧さのままでは最悪の場合には<疑われても仕方が無い>みたいな投げ遣り

な言い方にさえ見えかねない。さすがにそれは下文の反省意に反する曲解として広く却下されるだろうが、此处では構文上でも「心やましくおぼゆれど」という条件項を受けていて、当該条件項は〈御方への謝意にも関わらず〉との逆接と私は読むので、この「わりなしや」は御方を救う手立てが〈今は具体的に無い〉という文意になる、かと思う。 *「思ひそむ」は「思ひ初む(恋心を抱き始める)」ではなく「思ひ染む(胸に深く思う)」。

と、しひてぞ思ひ返して(と強いて思い直して)、「*さはいへど(私が言い寄ったことの疑いはあっても)、え思し捨てざめりかし(長居しているということは、宮は御方をお見限りは仕切れならしい)」と(と懸念の反面)、*うれしくもあり(後見世話役としては御方の安泰が喜ばしくもあり)、「人びとのけはひなどの(御方の側近女房たちの様子が)、なつかしきほどに萎えばみためりしを(宮家の威厳を損なうほど親しみ易く着古していたようだった)」と思ひやりたまひて(と気配りなさって)、母宮の御方に参りたまひて(母宮の御部屋に出向きなさって)、 *「さはいへど」の変数「さ」には何が代入されるのか。上文では「心やまし」の原因として「これはわが心のをこがましく悪しきぞ」という論理展開が示されている。この「さ」はその論理性を改めて取り上げて、「いえど」が〈そういう内実が仮に真だとしても〉という新たな論理提示を試みている、のだろう。 *「うれし」は〈喜ばしい〉という上首尾を歓迎する気持だろうが、宮が御方を可愛がるのは、薫君自身の恋路には不都合だ。ということは、あくまで後見人として御方の安寧が望ましいという立場に「思ひ返して」いるようで、その文意で下文に続くらしい。が、本文でも「しひてぞ」とあるように、読者は薫君の邪心の消失など信じないので、此处でも敢えて〈後見人として〉と断りを補語しないと、薫君の気持の描写と体面上の言動の描写が混同して、とても分かり難い語りに聞こえる。

「よろしき*まうけのものどもやさぶらふ(女房たちなどに与えるべき、そこそこの仕立服があるでしょうか)。使ふべきこと(用立てたいのですが)」 *「まうけのもの」は〈準備してある品物〉と大辞泉にある。衣類なら〈仕立服、既製品〉だろうが、「まうけ」は〈宴席の用意〉であり、ある程度の畏まった儀式に則った様式という語感があるとすれば、「よろしき」には〈適当な〉という一般意よりは〈それなりの格式の〉という具体意があるのかもしれない。

など申したまへば(など相談申しなされば)、

「*例の、立たむ月の法事の料に(恒例の来月の齋月参拝用の御布施代に)、白きものどもやあらむ(白無地の布はあるでしょう)。染めたるなどは、今はわざともしおかぬを(染物などは今は特に用意していないので)、急ぎてこそせさせめ(急いで作らせましょう)」 *「れいのたたむつきのほふじ」は注に〈以下「急ぎてこそせさせめ」まで、女三宮の詞。来月九月の法事の料。「例の」とは、正月・五月・九月の齋月の法事をさしていう。〉とある。「齋月(いみづき、いはひづき)」は大辞泉に〈《特に齋(い)み慎む月と考えられたところから》1月・5月・9月の称。その月の1日には、身なりを整えて祝ったり、社寺へ参ったりした。〉とあり、更に参照として「三長齋月(さんちやうさいぐわち)」の項に〈仏語。在家の信者が八齋戒を守り精進する、1月・5月・9月の三つの月。この月には諸天や鬼神が四方を巡行し、一切の善悪を四天王に報告するという。三齋月。〉とあるが、そういう仏教行事があるらしいと思う他に、私には特に思い当たる情緒は無い。

とのたまへば(と母宮が仰ると)、

「何か(何もそれには及びません)。ことことしき用にもはべらず(たいした用ではございません)。さぶらはむにしたがひて(あり合わせのもので十分です)」

とて(と応えて薫君は)、*御匣殿などに問はせたまひて(衣装係に調べさせ為さって)、女の装束どもあまた*領に(女装束の何組もに)、細長どもも(飾り上着類も)、ただあるにしたがひて(あるものの中から)、*ただなる絹綾などとり具したまふ(白い綾織物をあわせなさいます)。 *「みくしげどの」は<内裏の貞観殿(じょうがんでん)の中にあり、内蔵寮で調進する以外の天皇の衣服などの裁縫をする所。>また<《「御匣殿の別当」の略》御匣殿の女官の長で、上臈女房になる。>と大辞泉にあり、「貞観殿」は<平安京内裏十七殿の一。内裏中央の北端にあり、常寧殿の北に位置した。皇后宮の正庁で、後宮の事務をつかさどった。御匣殿(みくしげどの)。>とあるので、正式の役所名という語用が多いようだが、此处では<三条宮邸の衣裳部屋ないし衣装係>だろうから、そういう語用もあるらしい。 *「領」は「くだり」の読みで<一揃い、一式、一組>のこととあるので、下着・内着・袴などを一組にしたもの、なのだろう。 *「ただなる絹綾など」は<染めていない絹綾>のことらしく、「絹綾(きぬあや)」は<薄い綾織りの絹織物。>と大辞泉にある。

*みづからの御料と思しきには(御方本人用に相応しいと思われるものとしては)、*わが御料にありける*紅の擣目なべてならぬに(薫君用の衣料とされていた赤色の打目絹の上等なものに)、白き綾どもなど、あまた重ねたまへるに(白い綾織物を何枚も加えなさったが)、*袴の具はなかりけるに(揃えにすべき袴の類は無かったものの)、*いかにしたりけるにか(どういうわけか)、*腰の一つあるを、引き結び加へて(腰紐が一本有るのを、その一式に引き結び加えて)、 *「みづからのごれう」は注に<中君自身の御料。>とある。「みづから」は大辞泉に《「み(身)つから」の音変化。「つ」は「の」の意の助詞。身そのもの、の意」と説明がある。更に少し独善解釈を試みれば、「から」は<「～くあり(～としている)」の未然形>で、語用としては助詞「ば」が付く場合と同様の仮定形ないし制約条件想定文型で<～の場合、～としては>という意味を示すとすれば、「みづから」は<本人用を想定する場合>となって、此处の文意に符合する。というのに、肝心の「対の御方」という明示語を省くから、ひどく紛らわしい言い回しに見える。というのも、「わが御料」と続く語りとの紛らわしさ故に、普通なら単に「御料」で済むところを態々「みづからの」という形容句を言い足したという構文上の稚拙さがあるからなのだろう。「みづからの」と言わずに、「わが御料」の方を別の言い方にすれば余程分かり易いように思えてならない。尤も私には、どう言い換えれば良いのかは分からないが。 *「わがごれう」は薫君用の衣類、らしい。 *「くれなゐのうちめ」はベニバナ染めの絹織物を板の上で木槌で叩いて艶出ししたもの、らしい。 *「袴の具」の「具」は<そろへ・そなへ>ではなく「ぐ」と読みがある。「具材」はある一定の様式一式を揃える為に必要な材料だから、「袴の具」は衣装一式に供する為の袴の類ないし袴に相応しい生地のこと、なのだろう。 *「いかにしたりけるにか」は注に<語り手の疑問を差し挟んだ挿入句。>とある。が、「疑問を差し挟んだ」体で、次の歌の御膳立てをして話運びに色を添える、というための演出上の言い回しであり、こういう手法はこの物語では今までにも多く取られていて、筆致としては取って付けたような印象の場合も少なくない。ただし、色を添えると言っても、本当にその場だけの軽い冗句の場合もあるが、まるで間が差す怖さのように、それが話の重要な展開の契機になる場合もあるようで、案外この手の演出こそに作者の閃きや幅の面白さが示されるのかも知れない。 *「こし」だけでは何を言っているのか分かり難いが、「引き結び加へて」とあるので袴の<腰紐>のことを言っているらしい。

「結びける契りことなる下紐を、ただ一筋に恨みやはする」(和歌 49-15)

「場違いな 下紐だけが 惜しまれる」(意識 49-15)

*注に<薫から中君への贈歌。「結ぶ」「下紐」「一筋」縁語。>とある。この見舞品の添え句として読めば、「結びける契り」は<まとめた一組>であり、「ことなる下紐を」は<それに不相応な袴紐を>であり、「ただ一筋に」は<

この一本だけが>であり、「恨みやはする」が<惜しまれるところ>という冗句のオチとなるので、「うらみや」の「や」は失敗に驚いてみせている<実に何とまあ>という感嘆詞で、「はする」は「ただ一筋に」の複意<唯一の>を受けて<これこそが～となるところ>という言い方になっている。通せば<この見舞品にまとめた一組で、この不相応な下袴の紐の一本だけが、実に何とも残念です>という謝意めかした軽口だ。が、「実に何とも残念です」は<本当に心残りです>であり、冗談で深刻な反省は示せないから、この「心残り」は<軽率でした>ではなく<果たせぬ恋心>を示して、「わりなしや。これはわが心のをこがましく悪しきぞかし。うしろやすくと思ひそめてしあたりのことを、かくは思ふべしや」と思った反省などそっちのけで、性懲りも無くまた口説きに掛かっている、という始末の悪さだ。確かにこの歌の複意では、「結びける契り」は御方に対して<あなたが既に結んでいる匂宮との縁>だから、「契りことなる下紐をただ一筋に恨みやはする」は<筋違いの私の恋心を一方的に迷惑とお思いでしょうか>という御方への疑問文のようにも、「恨みや」の「や」が係助詞として読めるわけだが、そう読んでも反省ではなく言い寄りであることに違いはない。「下紐」は語感としても<縁を結ぼうとする下心>だが、大辞泉には<《古くは「したびも」》下裳(したも)・下袴(したばかま)などの紐。下結(したゆ)う紐。>とあり、「下紐(したひも)解く」の項には<下紐が解ける。相手に思われていると、下紐が自然に解けると信じられていた。>とあって、「信じられていた」かどうかは別として、そういう色っぽい言い伝えが広く馴染んでいたということは、語感以上に情事を具体的に示す語だったようだ。だから、この「うらみ」は<淡い恋心>などではなく<強烈な情欲>を訴える言い方なのだろう。

大輔の君とて、大人しき人の、睦ましげなるにつかはす(薫君は、大輔の君という御方付きの年配の女房で気心の知れた者に宛てて、これらの見舞品を遣わします)。「たいふのみみ」は注に<中君付きの女房。「早蕨」巻に登場。>とある。「大輔の君」が弁の御許の後継となる御方の筆頭女房だったらしいが、「大輔」は<筆頭の助っ人=事務次官=交渉実務の責任者=有能な行政官>という中堅名家の家柄らしく、そういう御方体制の組織内情をも示す語りなのかも知れない。いや、それがナンボのモンかは私にはトンと分からぬ世界だが、由緒と教養だけはありそうだ。

「とりあへぬさまの見苦しきを(取り敢えず揃えた粗末な物ですが)、つきづきしくもて隠して(各女房に適当に上手くそれとなくお配り下さい)」

などのたまひて(など書き記しなさって)、*御料のは(御方様用の品は)、しのびやかなれど(目立たないようだが)、筥にて包みも異なり(箱入りになっていて包み布も格別です)。*御覧ぜさせねど(大輔の君は宮の御在宅中は、御方には御覧に入れませんが)、さきざきも(以前から)、*かやうなる御心しらひは(このような御方に仕掛け加えられた中納言殿の御戯れは)、常のことにて目馴れにたれば(いつものことと見慣れていたので)、けしきばみ返しなど(とんでもない不埒なことと血相を変えて送り返すような)、*ひこしろふべきにもあらねば(受け取りを拒否すべきものでもない)、いかがとも思ひわづらはで(特に気にも掛けずに)、人びとにとり散らしなどしたれば(中納言の御見舞品を各女房たちに分け配ったので)、おのおのさし縫ひなどす(各自それらを仕立て縫うのです)。*「ごれう」の尊敬語「御」は<御方様(用)の>の意味で、「御料」で<御方様用の衣料>という言い方になるのは普通の日常語用で、「みづからの御料」よりはむしろ分かり易い。*「御覧ぜさせねど」は注に<「させ」使役の助動詞。匂宮がいる折なので、大輔の君は気を利かせて中君の前に差し出さない。>とある。この匂宮の手前という点は重要なので、従って明示補語したい。*「かやうなるみこころしらひ」は渋谷訳文に<このようなお心配り>とあって、対象がはっきりしない。「かやうなる」は、薫君の見舞行為自体なのか、女房たちへの気遣いなのか、その一式様式の衣料選別方法なのか、いや、御方への特別な配慮なのか。この目的語は当文

の肝なので、此処がはっきりしないと文意が分からない。さて、「心しらひ」は<気持をあしらう→特に付け加える>という語感だから、見舞行為自体や全体に対する言い方には見えず、と言って、御方用の品物が特別扱いであることは、女房たちとの主従の立場の違いから当然であり、その事を隠す必要も無いし、隠せば逆に怪しい。となると、やはり隠すのは思わせぶりな贈歌と戯けた袴紐仕様としか思えない。で、「御覧ぜさせぬ」のは匂宮が在宅中はこの配慮であり、宮が出掛けた後になって、御方に子細を知らせるのだろう。それが「大人しき人の睦ましげなるにつかはす」の文意だろう。となると、この「御心しらひ」は、あくまでも大輔の君の目線で言うところの<御方に仕掛け加えた御戯れ>くらいの言い方なのだろう。もし不慣れな女房が、この薫君の歌と贈物仕様を「戯れ」と解さなければ、とても取り次げない「けしきばみ返しなど、ひこしろふべき」<不祥事>である。*「ひこしろふ」は小学館古語辞典では項目が無いが、訳文の<固辞する>が文意に符合するので従いたい。我流解釈では、「ひ」が強意の接頭語で、「こしろふ」が「こしらふ(構える、構えて対処する)」の訛り、のように見える。

若き人びとの、御前近く仕うまつるなどをぞ、取り分きては繕ひたつべき(若女房の御側近くで仕える者などは特に新調の服で見違えます)。下仕へどもの、いたく萎えばみたりつる姿どもなどに(下働きのひどくみすぼらしかった姿が)、白き袷などにて(白い袷着ですっきりと動き易く見えるのが)、掲焉ならぬぞなかなかめやすかりける(裏方が目立たなくなったことで目障りにならないで良かったようです)。

[第五段 薫、中君をよく後見す]

*誰かは(中納言以外の誰が)、何事をも後見かしづききこゆる人のあらむ(こんなに周到に何事も援助申し上げる人がいるでしょうか)。*この文が上文と切り離される段替え校訂は非常に疑問だ。段替えが必要かどうかの妥当性は、如何せん此処では段頭なので分からないが、下文も当文を受ける文意のようなので、段替えするならせめて、上文の「若き人びとの」からにすべきだろう。

宮は、おろかならぬ御心ざしのほどにて(匂宮は疎かにしない御方への御執心ぶりなので)、「よろづをいかで(全てに手厚く遇したい)」と思しおきてたれど(と考えていらっしやったが)、こまかなるうちうちのことまでは(細々とした生活事情までは)、いかがは思し寄らむ(どうしてお気付きなさいましょう)。限りもなく人にのみかしづかれてならはせたまへれば(最上の待遇を人々からばかり受ける生活に慣れていらっしやるので)、世の中うちあはずさびしきこと(生活上の物資が足りずに困るという事が)、いかなるものとも知りたまはぬ(どういうことかお知りにならないのは)、ことわりなり(無理ありません)。

艶にそぞろ寒く(風情めかした寒さの中で)、花の露をもてあそびて世は過ぐすべきものと思したるほどよりは(花の露を愛でて暮らすものとお思いでいらっしやるよりは)、思す人のためなれば、おのづから折節につけつつ(大事な女のためなら、当然季節変化に応じて)、まめやかなることまでも扱ひ知らせたまふこそ(生活面の細々としたことまでも御世話くださるのが)、ありがたくめづらかなることなめれば(尊く有難いことなので)、「いでや(どうもその点、宮はいかなるものか)」など、誹らはしげに聞こゆる御乳母などもありけり(などと非難めいたことを口にす御乳母などもいたようです)。「えんにそぞろさむく」は、「艶に(風情に遊んで)」で読点となり、「そぞろ寒く花の露をもてあそびて(実は寒いのに花の露を愛でて)」と読むべき文なのではないか。またそれに、当文は単

に分かり難いだけでなく蓮っ葉な物言いの印象もあるので、口語文括弧の校訂も、この「艶に」から「いでや」までの全体が御乳母の発言と見た方が良さそうな気もする。

童べなどの(童女で)、なりあざやかならぬ(身なりの映えない者が)、折々うち混じりなどしたるをも(時折混じっているのを)、女君は、いと恥づかしく(御方は妻として体裁を繕う気持から、とても恥じて)、「なかなかなる住まひにもあるかな(二条院は自分には過ぎた立派な住まいだ)」など、人知れずは思ふことなきにしもあらぬに(などと内心ではお思いになる事が無きにしも非ずだが)、ましてこのころは(増して此処に来て)、世に響きたる御ありさまのはなやかさに(世に鳴響く源氏姫の六条院の新妻の華やかな暮らし振りに)、かつは(見比べれば一方の当方を)、「宮のうちの人の見思はむことも(宮付きの女房たちが見ては思うところも)、人げなきこと(見劣りすることだろう)」と、思し乱るることも添ひて嘆かしきを(と思い乱れなさることも加わって情けない思いのようなのを)、

中納言の君は、いとよく推し量りきこえたまへば(中納言の薫君はとても良くお察し申しなさるので)、疎からむあたりには(事情を良く知らぬ、本当に疎遠な人にであったら)、見苦しくくただしかりぬべき心しらひのさまも(粗末で煩雑なものに成り予ねない今回のあり合わせの見舞品という形も)、あなづるとはなけれど(御方を軽んじてのことではないが)、「*何かは(どうかすると)、ことごとくしたて顔ならむも(特別に用意した形になるのも)、*なかなかおぼえなく*見とがむる*人やあらむ(却ってこの時期に特別な見舞がある心当たりが無く不自然で誰かが何かの異変を勘繰るかもしれない)」と、思すなりけり(とお思いになっての事なのです)。 *「何かは」は、結びの「人やあらむ」に掛かるのだろう。 *「なかなかおぼえなく」は、今の時期が殊更に見舞を受ける季節の変わり目ということでもなく、特別な贈り物は変に目立つ、ということなのだろう。 偶々薫君には女房たちの着古し姿が目についた事での見舞品となったようだが、偶々気付くという関係性が少なからず親密さの表れではあるわけで、であれば、良い品物を贈っても公然の間柄であれば問題は無さそうだが、公然の後見人としても出過ぎた真似は避けるべきだろうし、特に今は宮の神経を刺激するのは面倒だ。 *「見答む」は<変に思う>という一般語用も成立するだろうが、むしろそういう遠回しな言い方で<宮が妻の不貞を疑う>ということを経口めかして噂に立つような面白さを表現しているのだろう。 *「ひと」は匂宮のことだろうが敬語遣いが無く、ぼかした言い方をしているので、言い換えもぼかしたままにする。

*今ぞまた(というわけで今回もまた)、例のめやすきさまなるものどもなど*せさせたまひて(薫君は御方に、例によって女房たちを見苦しくない服装にさせなさるように計らいなさって)、*御小桂織らせ(御方の上着を御方の指示で女房に新調させ)、*綾の料賜はせなどしたまひける(女房たちに飾り着の生地を与えさせたりなさったのです)。 *「今ぞまた」は、上文とは別のことを更に加えて語るのではなく、上文の事情をまとめて此処に結論を語るもの、と読んで置く。 文脈からして、そう読むのが一番分かり易い文意だと私には思えるし、下文に「この君しもぞ」とあることから主語は薫君だろうが、それでも当文の「せ」が誰が誰にする使役の助動詞なのかも分かり難く、「今ぞ」も「また」も新展開を誘う副詞語用も多い言葉にも思え、非常に紛らわしい難文である事に変わり無く、是が当時の普通の言い方だとしても、未だに全体に納得感が無い。 *「せさせたまふ」は帝の帝自身の言動に対する三重敬語として使われるようだが、此処では「せさす」は<御方が女房に遣らせなさる>で、「たまふ」が薫君への敬語なのだろう。 *「おおんこうちぎ」は<御方の上着>だから、「おらせ」は<御方が女房に作らせ>るのだろう。 *「あやのれう」は<綾織の衣料=素材生地>で、「たまはせ」は<御方が女房に与えなさることが出来る分>だろうか。 一応、そう読んで置く。

この君しもぞ(この薫君にしてからも)、宮に劣りきこえたまはず(匂宮に劣り申しなさらず)、さま異にかしづきたてられて(特別に大事に育てられて)、*かたはなるまで*心おごりもし(融通の利かないほど独善を通し)、世を思ひ澄まして(世の中が分かったように取り澄まして)、あてなる心ばへはこよなけれど(上流貴族の優雅な特権意識はこの上なく強かったが)、故親王の*御山住みを(こみこのみやまずみを、故八宮の宇治住まいを)見そめたまひしよりぞ(良く見知りなさって以降は)、「さびしき所のあはれさはさま異なりけり(田舎暮らしの貧乏は身に沁みる)」と、心苦しく思われて(と山荘暮らしを、気の毒にお思いになって)、なべての世をも思ひめぐらし(世の中の全体の暮らしぶりまで考えてみて)、深き情けをもならひたまひにける(恵まれない人に深い同情を寄せるようにお成りなのです)。いとほしの人ならばしや(とても望ましい人の在り方です)、とぞ(とか御方付きの女房たちは言っているようです)。 *「かたは」は「片端」とも表記されく不完全だ→見苦しい>という語用が多いらしく、「片端者」という現代語は身障者に対する差別用語として使用制限があるようだが、此处での「かたは」は「あてなる心ばへ(上流意識→格好を付けて取り澄ました冷たい態度)」に掛かる修辞なので<見苦しい、不恰好だ>というのは冗句でも無い限り成立しない矛盾表現で、此处では貴人を冷静に見定める女房の辛辣さはあるものの、軽口口調でも無いだろうから、別の語用を考えるべきだろう。で思うに、「かたは」の「かた」は「片(部分)」と当てられるが、この「かた」は「頑なし」「難し」とも同語幹の「堅(強固)」という語意でもあって、「は」は「端」も当て字で、元は事物の傾向性質を示す助動詞「はず」が接尾した「かたはず」という語があり、その名詞化および形容動詞化に伴う短縮形で「かたは」になったと見れば、この「かたは」は<硬直している→型にはまっている→融通が利かない>くらいの言い方になるだろう。 *「心おごり」はくうぬぼれること。思い上がり。慢心。>と大辞泉にある。が、此处では文脈からして、他に対する優越感ではなく、自尊からする独善性を指すかと思う。 *「御山住み」は「みやまずみ」とローマ字読みがある。「山」ではなく「山住み」への敬称なら、「御」は「み」ではなく「おおん」に成りそうな気がするが、全く「御」は分からない。

[第六段 薫と中君の、それぞれの苦悩]

かくて(そういうわけで)、なほ(改めて薫中納言は)、「いかでうしろやすく大人しき人にてやみなむ(やはり穏便に後見人で居よう)」と思ふにも(と考えても)、したがはず(収まらず)、心にかかりて苦しければ(御方が気になって仕方が無いので)、御文などを、ありしよりはこまやかにて(御手紙を以前よりは細々と言葉多く)、ともすれば、忍びあまりたるけしき見せつつ聞こえたまふを(ともすれば、抑えきれない気持ちを打ち明けてお書きになるのを)、女君(御方は女の立場で)、いとわびしきこと添ひたる身と思し嘆かる(とても困った事情が重なった身と思ひ嘆かれます)。

「ひとへに知らぬ人なれば(ただ言い寄って来ただけの人ならば)、あなものぐるほしと(何と常軌を逸したこと)、はしたなめさし放たむにもやすかるべきを(邪険に突き放すのも容易だが)、昔よりさま異なる頼もし人にならひ来て(昔から格別な頼りになる人と馴れ親しんで来て)、今さらに仲悪しくならむも(今さらに遠ざけて何かあったようなのも)、なかなか人目悪しかるべし(却って目立ってしまう)。

さすがに(しかし穏便にしようにも)、あさはかにもあらぬ御心ばへありさまの(浅くはない中納言殿の御意向や態度に)、あはれを知らぬにはあらず(気付かぬ顔で無視も出来ない)。さりと

て(かと言って)、心交はし顔にあひしらはむもいとつつましく(馴れ馴れしくするのは厳に慎まれるし)、いかがはすべからむ(どうしたものか)」

と、よろづに思ひ乱れたまふ(と、いろいろ思い悩みなさいます)。

さぶらふ人びとも(仕えている女房たちも)、すこしものの言ふかひありぬべく若やかなるは、皆あたらし(少し女心の分かりそうな若女房は皆新参者で)、見馴れたるとては(事情が分かりそうな者は)、かの山里の古女ばらなり(薫君の気を紛らわせる事が出来そうもない、かの山里の老女連中なのでした)。思ふ心をも(悩みを)、同じ心になつかしく言ひあはすべき人のなきままには(同じ立場で親身に相談できる人の無いままに)、故姫君を思ひ出できこえたまはぬ折なし(御方は故姉君を思い出し申しなさらぬ時はありません)。

「おはせましかば(ご存命であったら)、この人もかかる心を添へたまはましや(故姉君もこんな悩みをお持ちになっただろうか)」

と、いと悲しく(と、とても悲しく)、宮のつらくなりたまはむ嘆きよりも(宮が冷たくなりなせる嘆きよりも)、このこといと苦しくおぼゆ(この中納言の横恋慕にととても困りなさいます)。